長野市立博物館 Nagano City Museum

博物館だより

第76号 2011.2.1

承元三年(1209)の銘のある石造物が見つかりました

石造物発見時の状況と考察

発見の経緯

平成22年(2010)8月、長野市松代町豊栄3番地の土地所有者である関屋輝顕氏が、大雨によって一部が崩れた同所の墓地を修理するため擁壁(ようへき)工事を行っていたところ、何らかの文字が彫ってある柱状の大きな石材が出てきた。施工業者の勧めを受けた関屋氏は、長野市埋蔵文化財センターに連絡し、現地を視察した職員によって、文化財であることが確認された。その後、文化財保護法の規定に基づく遺跡発見届が提出され、現在は関屋氏の御厚意により現地で保存されている。

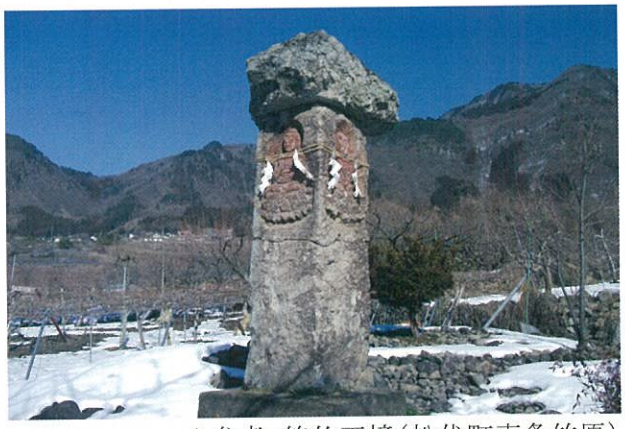
発見場所は、千曲川支流の蛭川によって形成された河岸段丘の縁に位置している。現場は周辺よりも小高く、積石塚古墳状を呈しているものの、古墳時代の遺物はまったく確認できなかった。また、敷地からは五輪塔を含む石造物が多く出土しており、中世から続く墓地である可能性が高いものと考えられる。

石造物の石材については、当館学芸員の畠山幸司(地質学)の所見によると、暗灰色ガラス質輝石安山岩に近似するものと同定された。柱状の自然節理であることから、近隣の清滝安山岩が産地として想定されるが、含有鉱物の斑晶の大きさが明確に異なっていること等から同地との同定は難しい。また、周辺の松代町東条竹原には市指定文化財の「笠仏石幢」とよばれる鎌倉時代初期と推定される石幢があるが、こちらの石材は松代町金井山で現在も採掘されている柴石(柴溶結凝灰岩)と推定され、豊栄の石造物とは異なる。したがって、豊栄の石造物は他所から石材が運搬されてきた可能性も考えられる。

発見された石造物は、石の形態から「六面石幢」等の中世石造物の可能性が考えられる。石幢であるとすれば、前述の「笠仏石幢」や、長野県埋蔵文化財センターが調査した千曲市社宮司遺跡出土の、平安時代末期の「六角木幢」との関連も考えられるが、これらの点に関する予察については、いいづな歴史ふれあい館学芸員小山丈夫氏から玉稿を賜った(6・7頁掲載)。

発見された石造物について

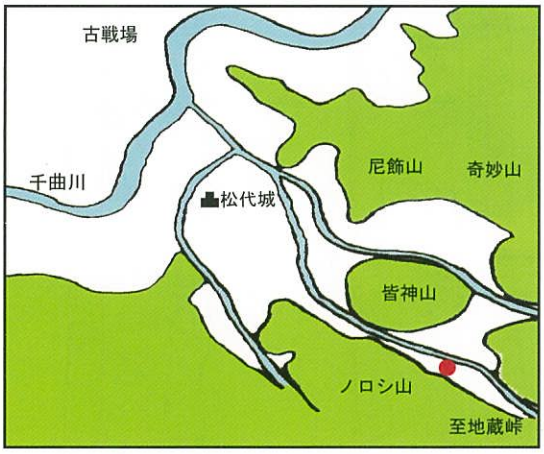
発見された石造物は、自然節理の五～七角柱が3本で、以前は石積みの土台として埋められていたようである。石造物1(中央)は、長径65cm、短径57cm、現存長273cm(推定313cm)の七角柱である。七面のうち六面に①バーンク②バク③サ④アー⑤アン⑥キリーク(番号は4頁図面と対応)と推定される梵字が彫り込まれ、また銘文は「承元三年(1209)才次己巳拾月十八日願主神行忠」「右志者為神行平□也」が確認できた。石造物2(南側)は長径80cm、短径65cm、現存長257cm(推定297cm)を測る七角柱である。文字等の彫り込みはみられないが、楔(くさび)を打ち込むための穴など、人為的に加工したと思われる痕跡が数ヶ所で認められた。石造物3(北側)は長径74cm、短径51cm、現存長163cm(推定203cm)の六角柱であり、彫り込みは確認できなかった。



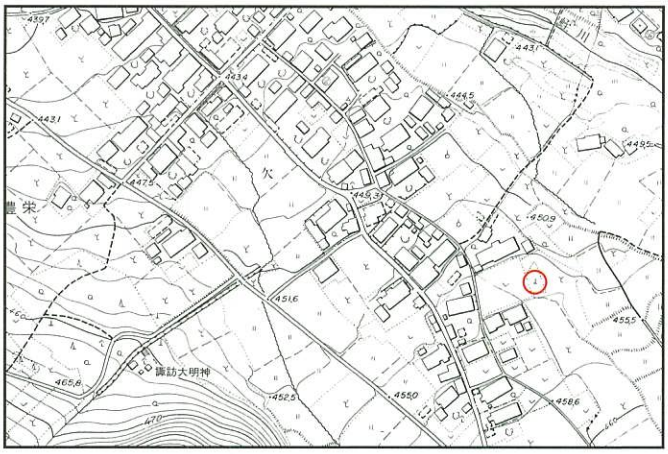
▲参考:笠仏石幢(松代町東条竹原)

今回の発見に際し、この石造物が大変貴重な事例となる可能性もあるため、拙速に結論を出すことは避け、本号の「博物館だより」をもって速報することにした。広くご見識をお持ちの皆様からご教示を賜りたい。

(文責:専門員　宮澤 崇士)



▲周辺略図。丸印は発見現場。



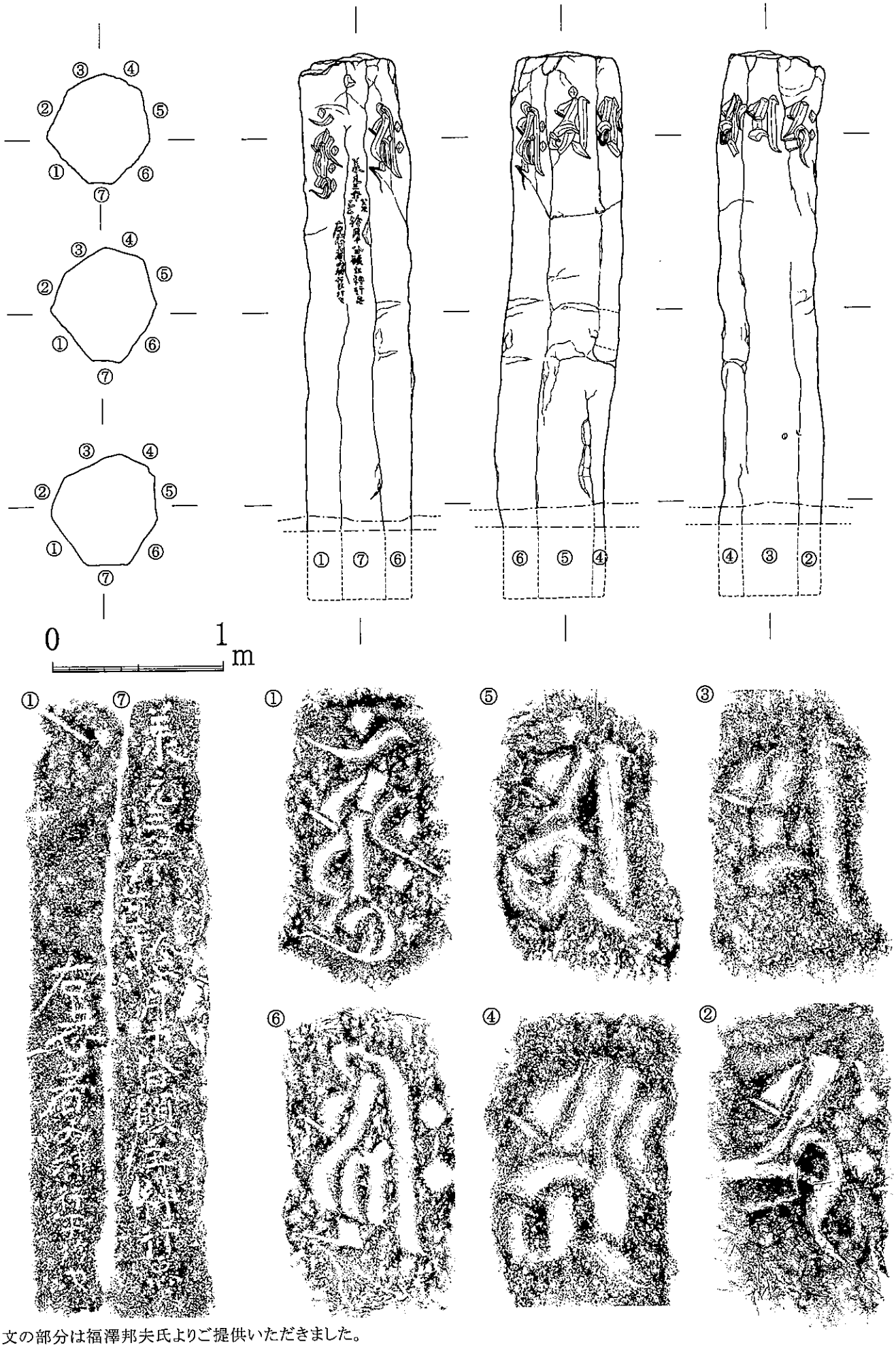
▲1/5000周辺地図。丸印は発見現場。

▲皆神山から見た豊栄周辺。

▲蛭川対岸から見た現場周辺。中央上部が墓地敷地。

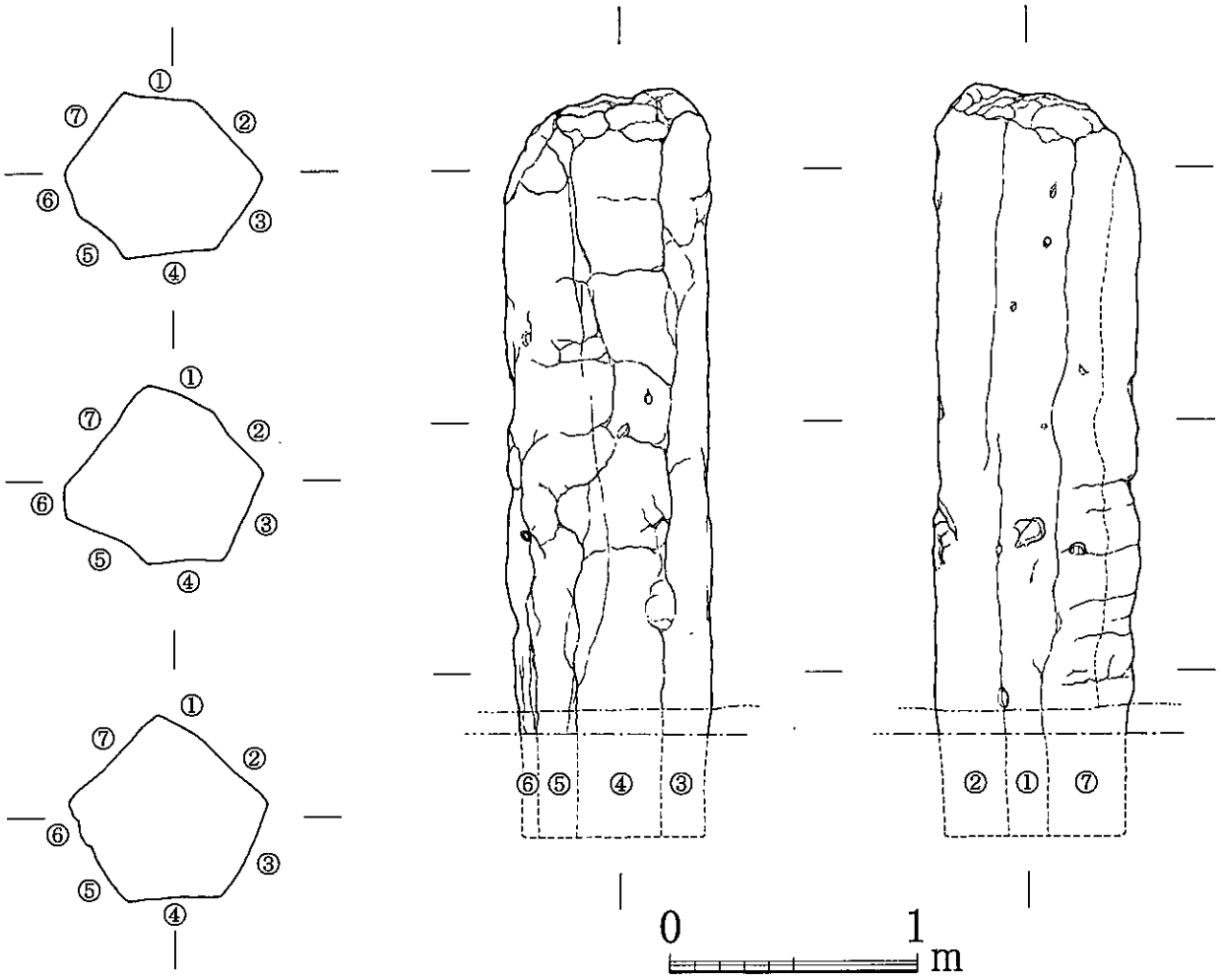
▲工事現場の脇に置かれた石柱。地表に露出していた部分には苔が付着している。

▲字が彫られている柱状の石。発見された3本の内、字が彫られていたものはこの1本だけだった。

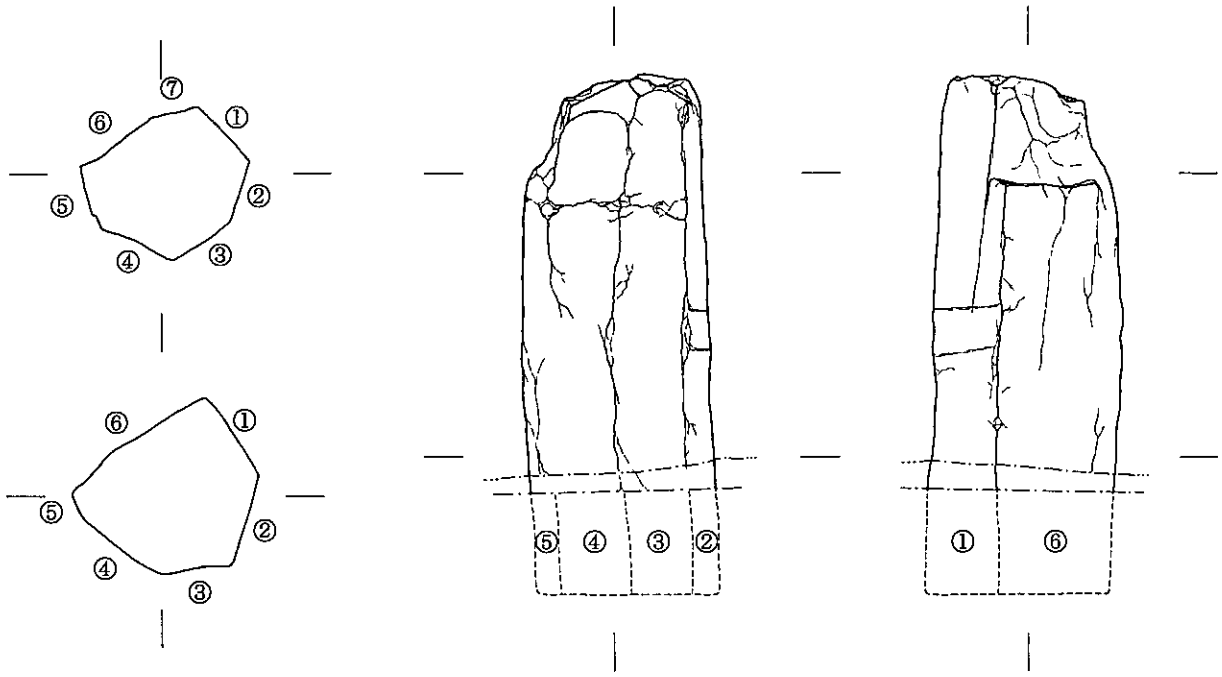


銘文の部分は福澤邦夫氏よりご提供いただきました。

第1図 石造物1実測図(Scale=1/30)、拓影(縮尺不同)



第2図　石造物2実測図(Scale=1/30)



第3図　石造物3実測図(Scale=1/30)

長野市豊栄欠関屋家墓地出土の六尊種子石幢について

小山丈夫

（飯綱町教育委員会　いいづな歴史ふれあい館学芸員）

【石塔の形態について】

今回出土した石塔は3基。うち1基がひときわ大きく、信仰対象標識の種子（梵字）や年号、造立趣旨の銘文が刻まれている仏塔である。3基1具であることに重要な意味があるのかも知れないが、ひとまず手がかりが豊富な最大の塔（石造物1、以下「本塔」）についてだけ見てゆきたい。

形態は七面体の方柱で、うち六面に大ぶりな種子が刻まれている。残る一面はひときわ狭く、年号銘だけ記されているので、信仰の対象物としては「六面の塔」ということに意味があるのだろう。

最大の種子は「バーンク」（五点具足のバーンク）で本尊格である。通例では金剛界大日如来の標識とされるものである。その他「バク」は釈迦如来、「サ」観音菩薩、「アー」開敷華王如来、「アン」阿弥陀如来または普賢菩薩、「キリーク」阿弥陀如来または千手観音、というような仏尊名が相当するものと一般的には説明されているが、密教において種子の表す意味は多種多様であり、一概には説明できるものではないという。この六尊種子の組み合わせにどんな意味が込められているのかは識者の教示を俟ちたいと思う。

多面柱に仏尊を表した石塔は石幢（せきどう）に分類されることが多い。幢（はたぼこ）は旛（はた）の一種で、仏菩薩の象徴的装飾として多角の笠の各面に旛を吊り下げ、それぞれの面に仏名や仏像をあらわしたものである。それを石で模したものが石幢と解釈されている。本来は上部に笠が伴うため、広義の笠塔婆に属するとして宝幢式笠塔婆（石田茂作説）と呼ぶべきとする見解もある。本塔の上部は笠石を置くための整形が明瞭ではなく、笠石があったかどうか分からない。ひとまず石幢と呼んで差し支えないと考える。

多角の石幢は中国唐代においては経文を塔身に刻んだ経幢が盛んに造られたといい、日本でも平安から鎌倉期には如法経塔（一定の作法にもとづいて書写した聖経（主に妙法蓮華経）の供養塔）として造立され、経塚の造営と関連する例も散見される。また千曲市社宮司遺跡から平成13年（2001）長野県埋蔵文化財センターの調査によって出土した平安末期の木製六角仏塔は「六角木幢」と命名され、多くの研究が公表されている。積石塚から出土し鎌倉時代初期の年号を持つ本塔がこれらと関連する資料になり得るかどうかは、本塔をどう評価するかにかかっているといえよう。

なお種子や銘文の形態については、現地を視察された福澤邦夫氏（(財)元興寺文化財研究所嘱託研究員、石造美術研究者）から「各種子は大ぶりで字画の幅は広く彫りが浅い。平安～鎌倉期の石造物に共通する特徴を有している。銘文の書体も時代相に適っている」とのコメントを頂戴していることを申し添えたい。

【銘文について】

年号銘は「承元三年　才次　己巳　拾月十八日願主神行忠」と読める。承元3年は西暦1209年、鎌倉時代初期の年号である。「承」と「年」は異体字である。「才次（歳次）」は年の美称である。「歳次」や「大歳」は神仏への奉納物などの金石文によく使われ、干支と並べて2列書きするのは平安～鎌倉期の金石文によく見られる書式である。この付近での実例を挙げれば、大治五年（1130）下高井郡山ノ内町平穏弥勒石仏銘、承安二年（1172）千曲市戸倉経ヶ峯経塚銅製経筒銘、治承三年（1179）大町市藤尾覚音寺木造千手観音像胎内銘、文治三年（1187）長野市戸隠神社旧蔵大般若経奥書(第四百二十巻)、同じく建長五年（1253）奥書（第九十九巻）などが「歳次」と干支の組み合わせである。

造立者銘にある「神」の姓は諏訪上社の司祭者大祝（おおほうり）の末裔が名乗った姓とされる。造立趣旨銘は「右志者為神行平□也」とある。「右の志は神行平の□の為なり」との意味だろうが、肝心な□の文字が判読できない。「菩提」の異体字（芽）がふさわしいと思うが、そう読めるだろうか。これも有識者の判断を仰ぎたい。だとすれば、神行忠なる人物が神行平の菩提を弔うために造った石塔である、という解釈が成り立つ。

【神行平・神行忠について】

銘文中にみえる二人の人物について手がかりは無いだろうか。

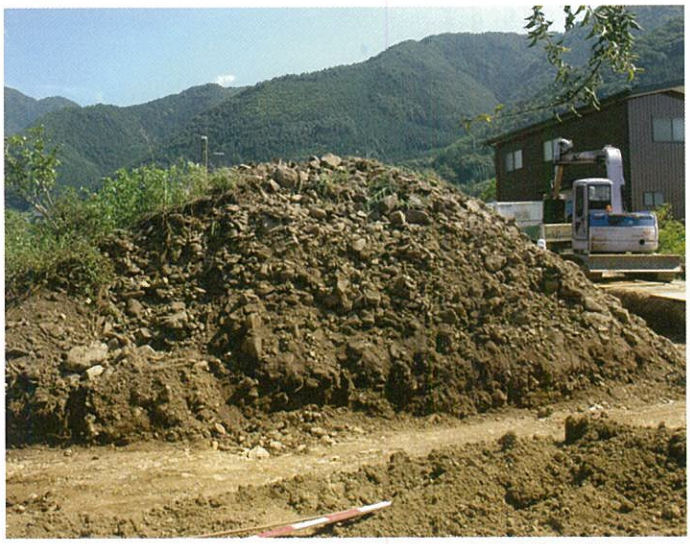
本塔が発見されたのは関屋氏一族の墓地であった。前述のように墓地は積石塚状の墳丘で、上部に関屋家の墓石が並んでいる。なかには中世に遡る五輪塔や宝篋印塔の部材も集積されている。その中央に近代の建立と思われるが、関屋氏祖の諏訪神氏為仲の供養塔があって、関屋氏は諏訪大社の司祭者として神（みわ・じん）氏を名乗った上社大祝の末裔である、と伝承してきたことがわかる。関屋氏は本塔の出土した欠集落に隣接する関屋の地を本貫とした豪族で、室町時代にはその存在が確認できる。

前田家本「神氏系図」（室町時代成立）によると、為仲から四代目の行光は関屋源三を称し、その子に神大夫「行平」があり四宮氏の祖となったとある。さらには行光の弟に深沢四郎「行衡」、またその子に三塚二郎「行忠」がある。「行衡」は「行平」に音が通じる。為仲は後三年の役に際して源義家に従い出羽へ出征したと伝えられる大祝で、その後裔という行平・行忠らの時代はおよそ石塔の年代と符合するのであろうか。

これらの人物がはたして石塔銘の名とどんな関係を有するのか、その実証性があるのかどうかは今後の課題である。従来の研究では、神姓は鎌倉後期から史料上に現われるもので、平安～鎌倉初期には実証できないとの見解がある。その観点からすると、本塔の資料価値は疑わしいものになってしまうが、本塔がそうした説を覆す新史料になる可能性もあながち否定できない。

いずれにせよ、長野県で最古級の銘文を有する石造文化財の新発見である。本塔の形態・種子の彫刻法・銘文の書式・異体字などを、異なる研究視角から多角的に分析し、その史料的価値を正当に位置づけることが必要と考える。

発見当時の様子



▲積石塚古墳状の墓地敷地

▲同時に出土した五輪塔

現在の様子

▲南西側から見た現状

▲北東側から見た現状

博物館のHPアドレス

http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/index.html

長野市立博物館	〒381-2212 長野市小島田町1414	026(284)9011
戸隠地質化石博物館	〒381-4101 長野市戸隠栃原3400	026(252)2228
鬼無里ふるさと資料館	〒381-4301 長野市鬼無里和田沖・国道406号線沿い	026(256)3270
信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館	〒381-2404 長野市信州新町上条88-3	026(262)3500
ミュゼ蔵	〒381-2405 長野市信州新町37-1	026(262)2500